

パワーストーン

おおぎやなぎちか



あたしには、八歳さいのときまで、お姉ちゃんがいた。

ママの妹が同じ家に住んでいて、あたしは叔母おばであるその人を、「お姉ちゃん」と呼よんでいたのだ。

お姉ちゃんは、ママが中学生のときに生まれたのだという。そして、あたしは、お姉ちゃんが十歳さいのときに生まれた。

十歳さいのお姉ちゃんは、赤ちゃんだったあたしのおむつを替かえ、ミルクを飲のみませてくれた。

っていうのは、記憶きおくにはない。写真はあるけどね。

中学生のお姉ちゃんは、絵本を読んでくれて、いっしょに留守番留守番もした。

これは、少し覚えてる。

高校生のお姉ちゃんは、アニソンが好きで、すごく上手だった。あたしも、いっしょにおどりながら、歌った。

これは、もちろん覚えてる。最高に楽しかった。

姉妹がいる友だちはたくさんいたけど、あたしのように「大きな」お姉ちゃんが

いる子はいなかった。自慢だった。
大好きだった。

でも、お姉ちゃんは高校卒業と同時に家を出ていってしまった。アパレルショップの店員になって、ひとりぐらしをはじめたのだ。

最初のうちは休みの日にケーキを買って遊びにきたりしてたけど、だんだんその間隔があいて、去年からは一度も来てない。

あたしは今、ひとりっ子の五年生だ。

一 お姉ちゃんが来た

梅雨が明けた。なのに、あたしの気分は、どんより。じめじめ。

家でアイスでも食べてすっきりしようと思しながら、学校から帰ってきた。

ところが、ドアを開けようとしたら、鍵がかかっている。ママは地元の郵便局に勤めていて、まだ仕事のはず。具合が悪くて帰ってきてるとか？

……まさか、どろぼう？

と身をかたくして、げんかんに入る。すると……、リビングのドアが開き、その人があらわれた。

「おっ、瞳。おかえり〜」

「だれ?!」

「お姉ちゃんでしょう。ひさしぶりっ」

「あたしはひとりっ子ですが」

抱きついてこようとするその人をさけて、リビングへ。がちり、エアコンが効いていて、涼しい。

「つれないなあ」

無地Tシャツに、どこかの量販店で売ってる柄つきステコをはいたその人が、あとから入ってきて、ごろりとソファに寝ころぶ。髪の毛はボサボサ。金髪に染めてるところと、頭のとっぺんに黒く伸びたところがある。なさけないプリン頭だ。冷凍庫を開けたけど、夕べはあったアイスがない。